

2025 年度 年次大会

主催：

移民政策学会

開催校：

筑波大学

協力：

（一社）つくば観光コンベンション協会、つくば市

日時：

1 日目：2025 年 5 月 31 日（土）：12:30～18:00

2 日目：2025 年 6 月 1 日（日）：10:00～17:00

会場：

筑波大学筑波キャンパス（茨城県つくば市天王台 1-1-1）

開催形式：

対面（国際セッションについてのみハイブリッド対応）

アクセスマップ：

<https://www.tsukuba.ac.jp/access/tsukuba-access/index.html>

キャンパスマップ：

https://www.tsukuba.ac.jp/images/pdf/ut_map_tsukuba.pdf

参加費：

会員 無料

非会員（一般） ¥1,000 （学生） ¥500

※ 参加申し込みには以下の Peatix のフォームをご利用ください。

<https://jamps-annual2025.peatix.com>

※ 参加の申し込み締切は、5 月 25 日（日）23:59＜厳守＞です。

<取材を希望されるメディア関係者のみなさま>

- 大会の取材は 学会事務局までメールにて事前の申し込みをお願いしております。

- メールには、社名、担当者氏名、取材日時、取材内容（インタビュー、写真撮影、動画撮影等の要否）を記入ください。
- 写真撮影や動画の撮影がある場合は、開催校の腕章を着用してもらう必要があります。
- 取材日当日、担当者の名刺を大会の受付に提出下さい。

◆◆◆プログラム◆◆◆

1日目：5月31日（土）

<社会連携セッション>

「文化的・言語的に多様な子どもの『障害』をめぐる現状と課題

～『障害』判断の困難さと進路への影響・課題および今後の支援に向けて～」

12:30～15:00 1C棟 306教室

司会：野山広（国立国語研究所）

趣旨

2019年に文部科学省への情報公開請求により、日本の公立小学校の特別支援学級における外国人児童在籍率が日本人児童に比べて高いことが明らかとなり、その背景について様々な研究がなされてきた。外国人児童生徒の学習や行動面での問題は、発達障害に基づくものなのか、言語能力や文化の相違・ストレス、家庭環境・社会環境によるものなのか、見極めが難しいという課題があること、また外国人児童生徒への言語面・学習面の支援体制の未整備の課題があることが言われている。さらには発達障害を含む子どものインクルーシブ教育についての課題にまで発展するテーマでもありうる。

その中で、今回焦点を当てるのは、高校進学時に特別支援学校へ進学した場合、卒業資格はあくまでも「特別支援学校高等部卒」になり、一般の「高卒」とは異なりその後の就職の方向性が障害者枠での採用にほぼ決定してしまい、後から実は発達障害等が原因ではなく言語・文化・社会環境等が異なることが背景にあった一時的な困難状態であったということが分かっても挽回が非常に困難になることが認識されているか、という点である。小中学校で特別支援学級に在籍することにより、個々の特性にあった適切な支援を受けることができ能力を伸ばすことができるという

利点もあるが、特別支援学級に在籍することにより、内申点等に影響することで高校進学の際に普通高等学校への進学に不利になることもありうる。保護者、学校、教育委員会、支援者などの関係者の間で、そのような認識をもって外国人児童生徒への特別支援学級への就学が検討されているか、どのような支援が行われているのか、その点について専門家や研究者、現場の教員等と議論を交わす場を設ける。

報告：

1. 鈴木ゆみ(関西学院千里国際キャンパス カウンセラー)

「文化的・言語的に多様な子ども(Culturally and Linguistically Diverse Children: CLD 児)の言語・発達・こころ」

2. 藤川純子(スクールカウンセラー)

「特別な教育的支援ニーズのある外国ルーツ児童への学校における支援のあり方に関する報告」

コメンテータ：

1. 吉富志津代(武庫川女子大学)
2. 松岡真理恵(浜松国際交流協会)

<移民の食インタレストグループ>

13:00～14:00 1C 棟 305 教室

1. 小島宏(早稲田大学)「滞日ムスリム留学生におけるハラール食消費の家族関連要因」
2. 申恵媛(宇都宮大学)「日本における『コリアン』食の変化ー市場拡大と意味づけの変容ー」
3. 小宮理奈(東京都立大学大学院)「日本の学校給食とムスリム移民ー教育現場と家庭の工夫と葛藤ー」【報告辞退】

<特別企画>

「難民の受入れと地域社会の役割ー日本におけるアフガニスタン退避者・難民を事例として」

14:30～16:30 1D 棟 201 教室

企画・司会：金井達也(筑波大学)

企画趣旨

2021 年夏のアフガニスタン退避者の受入れは、日本社会にとって意味のある出来事であり、この苦難の経験を多角的に評価、検証することで、今後の日本の移民・難民政策にとっての示唆を考える。また、アフガニスタン退避者の受入れにおいては、今回の学会開催地でもある「つくば」が舞台の一つにもなっていることから、地域社会の役割や機能も考察していきたい。

報告

1. 明石純一(筑波大学)「難民の受入れと地域社会の役割」
2. 上原克則(国際協力機構)「アフガニスタン本邦退避者―退避の背景と退避者の特性―」
3. 長山和夫(日本国際協力センター)「日本語・生活・就労・教育にわたる総合的な支援プログラム」
4. 小川玲子(千葉大学)「アフガニスタン退避者・難民の定着の課題」

< 総会 >

16:45～18:00 1D 棟 201 教室

< 懇親会 >

18:30～20:00

場所: Soup Factory 1A 棟 2 階(学会会場の 1C 棟隣接)

懇親会費: 4500 円(一般会員) 2000 円(学生等)

2 日目: 6 月 1 日(日)

< 自由報告 >

自由報告 I

10:00～12:00 1C 棟 310 教室 司会: ゴロウィナ・クセーニヤ(東洋大学)

1. 鈴木彩莉(名古屋大学大学院)「在日インドネシア人女性の妊娠・出産におけるグッド・プラクティス―登録支援機関と特定技能労働者の事例から―」【抄録】
2. 龍田成人(豊田中央研究所)「フィリピン国籍の日系人の在留地域分布―ジェンダ対称性および在留資格比を用いた分析―」【抄録】
3. 佐藤美奈子(京都大学)「ブータンからオーストラリアへの移住における民族語復活の動向―多文化主義政策と家族単位移住の影響―」【抄録】
4. キムチュク・スヴェトラナ(筑波大学大学院)「在日ロシア人移民の社会適応を支える SNS の役割―社会的資本の視点から―」【抄録】

<自由報告II>

10:00～12:00 1C棟 306 教室 司会：長谷部美佳（明治学院大学）

1. 越智貴子（埼玉大学）「地方における『高学歴外国人材』の移動パターンと受入効果の分析－地域の産業特性と初期条件が及ぼす影響－」【抄録】
2. 首藤佳世（東京国際大学）、津田麻美（東京国際大学）、谷津裕子（関西外国語大学）「外国にルーツを持つ学生はどのように進路を選択するのか－東京国際大学の事例から－」【抄録】
3. 米野みちよ（静岡県立大学）「EPAによる看護師と介護士の受け入れプログラムの再考－公的受け入れ制度の意義と課題－」【抄録】

<自由報告III>

10:00～12:00 1C棟 305 教室 司会：菅原真（南山大学）

1. 石丸大輝（国際協力機構）「移住インフラと国際協力－日本によるベトナムのブローカー対策への教訓－」【抄録】
2. 荒木康充（宇都宮大学大学院）、松尾昌樹（宇都宮大学）「地域住民による外国人受入制度の選好－外国人人口規模と外国人就労分野の違いから－」【抄録】
3. 徳田剛（大谷大学）「市町村が多文化共生に関する条例を制定することの意義－長野県安曇野市、静岡県静岡市の事例より－」【抄録】

<自由報告IV>

10:00～12:00 1C棟 210 教室 司会：石川えり（難民支援協会）

1. 小野塚和人（東洋大学）「外国人労働力としての難民認定者の登用－オーストラリアの農村部における受け入れ策と支援策の考察－」【抄録】
2. 神田すみれ（愛知県立大学大学院）「アフガニスタン難民の定住化のプロセスに関する考察－東海地域の支援実践事例から－」【抄録】
3. 佐々木優香（獨協大学）「移民の社会統合促進における仲介組織の構造と役割－ドイツ・ノルトライン＝ヴェストファーレン州の地域統合センターを中心に－」【抄録】

< 国際セッション 1 >

10:00～12:00 1C 棟 406 教室

司会: OISHI, Nana (University of Melbourne)

1. Rethinking the “Disappearance” of Vietnamese Technical Interns: From the Perspective of Migratory Agency 【Abstract】

KATO, Jotaro (Meiji Gakuin University)

2. Who Aims for Japan? Economic Development, Migration, and Transnational Labor Market in Asia 【Abstract】

YAMANAKA, Keiko (University of California, Berkeley) and KOREKAWA, Yu (National Institute of Population and Social Security Studies)

3. International Migration and Socioeconomic Linkages in East Asia

SEOL, Dong-Hoon (Jeonbuk National University)

4. South Korea's Developmental Migration State and Functions of the State in Immigration Policy

LEE, Byoung-ha (University of Seoul)

< 国際セッション 2 >

10:00～12:00 1C 棟 405 教室

司会: GREEN, David (Nagoya University)

1. Domestic Violence in Cross-National Households in Japan: Examining Abuse Patterns, Victim Narratives, and Societal Awareness 【Abstract】

LUKYANTSEVA, Polina (Graduate School of Letters, Kyoto University)

2. A Study on the Integration Law of Immigrants and Refugees in Germany: the Cases of Baden-Wurttemberg and Bavaria 【Abstract】

OKUBO, Momo (Nippon Koei CO., Ltd.)

3. The Long Road to Welcoming Communities?: National Structures and Place-based Initiatives for Newcomer Settlement, Integration and Inclusion in Canada's Small Centres 【Abstract】

SILVIUS, Ray (University of Winnipeg)

<シンポジウム「大震災と移民 ～阪神・淡路大震災から 30 年～」>

13:45～17:00 1D 棟 201 教室

会長挨拶： 鈴木江理子（国土館大学）

開催校挨拶： 明石純一（筑波大学）

司会・趣旨説明： 鈴木江理子（国土館大学）

企画趣旨

阪神・淡路大震災から 30 年が経過した。

「災害大国」とも言われる日本は、阪神・淡路大震災以前も、それ以降も、多くの災害を経験している。そして残念ながら、これからも多くの災害を経験することであろう。

そこで、本シンポジウムは、「大震災と移民」というテーマで、関東大震災(1923 年 9 月 1 日)、阪神・淡路大震災(1995 年 1 月 17 日)、東日本大震災(2011 年 3 月 11 日)を取り上げ、4 名の報告者を迎えて、日本社会における移民／外国人を考えたい。

国籍や民族、性別や年齢にかかわらず、誰もが等しく被災する。けれども、発災後の避難、復旧・復興への道は、必ずしも「平等」ではない。震災は、「日本人」以上の大きな困難を、移民／外国人にもたらすと言われている。とりわけ、移民女性や移民／外国人高齢者が直面する困難は大きい。災害という「非常時」は、日常に潜むさまざまな「問題」を顕在化させるからだ。

もちろん、この間、NPO(市民組織)や地域住民、自治体や国など、多様なアクターによって「問題」解決や状況改善が図られてきたことも確かである。阪神・淡路大震災から 10 年を経た 2005 年、総務省は「多文化共生の推進に関する研究会」を開催し、翌 06 年に報告書を取りまとめた。そこでは、災害への対応に限らず、日常的なコミュニケーション支援、生活支援について総合的・体系的に検討されている。2018 年 12 月には、「外国人材の受入れ・共生に関する関係閣僚会議」が総合的対応策を策定し、「共生」に向けた 100 以上の施策を提示している(以後、毎年度改訂)。22 年 6 月には中長期的なロードマップも示されている(以後、毎年度一部変更)。

けれども、いまだ解決すべき「問題」も多く残されており、変わらぬ現実もある。移民／外国人の脆弱性は、コロナ禍でも、能登半島地震(2024 年 1 月 1 日)でも指摘されている。それは、「問題」への取組みが不十分だからであろうか。あるいは、取組みの方向性が間違っているのであろうか。「問題」把握に誤りがあるからなのであろうか。もしくは、目指している社会の「問題」なのであろうか。

このような問題意識のもと、本シンポジウムでは、大震災を手がかりとして、「移民／外国人」の視点から、「共に生きる」社会について議論を深めていきたい。

報告者

1. 安田 浩一（ジャーナリスト）「関東大震災と移民（仮）」
2. 吉富 志津代（武庫川女子大学）「阪神・淡路大震災から30年を振り返る
ー『多文化共生』と『ボランティア元年』の現状」
3. 李 善 姫（東北大学）「東日本大震災から問う日本の『ウチとソト』」
4. 大城 ロクサナ（ひょうごラテンコミュニティ）「阪神・淡路大震災からの30年
ー外国人住民の被災者として（仮）」

【理事会・各委員会について】

<5月30日（金）>

国際交流委員会：16:30～（オンライン）

<5月31日（土）>

企画委員会：10:00～11:15 1C棟 305 教室

編集委員会：10:00～11:15 1C棟 505 教室

社会連携委員会：10:00～11:15 1C棟 306 教室

理事会：11:15～12:30 1C棟 305 教室

<6月1日（日）>

新理事会：12:15～12:45 1C棟 305 教室